

psychology of education ではない) に求められている課題はこのようなものではなからうか。

(参考文献)

上記の議論に関して筆者が最近まとめたものを並べておきます。何かの参考になれば幸いです。

- ・「生涯にわたる成長・発達と自己概念の問題」梶田叡一編『自己認識 自己概念の教育』ミネルヴァ書房, 1987。
- ・「アメリカにおける成人発達論の背景と展開」「教育の中のエイジングの問題」社会教育基礎理論研究会編 叢書生涯学習Ⅶ『成人性の発達』雄松堂, 1989。
- ・「アメリカにおけるアンドラゴジー論」社会教育基礎理論研究会編 叢書生涯学習Ⅷ『学習・教育の認識論』雄松堂, 1991。
- ・「老年心理学の基礎」村井・藤田編 セミナー介護福祉7『老人・障害者の心理』ミネルヴァ書房, 印刷中。

提案論文 4.

## 生涯発達論と教育 ——三層になった人生——

梶 田 正 巳

### I. 大正と昭和の人生

生涯発達論や生涯教育論が人々の関心を集めるようになったのは何年頃からであろうか。種々の資料や研究を歴史的に回顧すれば、その流れを跡づけることができるであろう。そうした細かい分析は専門家にゆだねるとして、この小論では、筆者が強い関心を引かれた一つのデータを基にして、我流の生涯発達論を提案して、誌上シンポジウムの話題とすることにしたい。

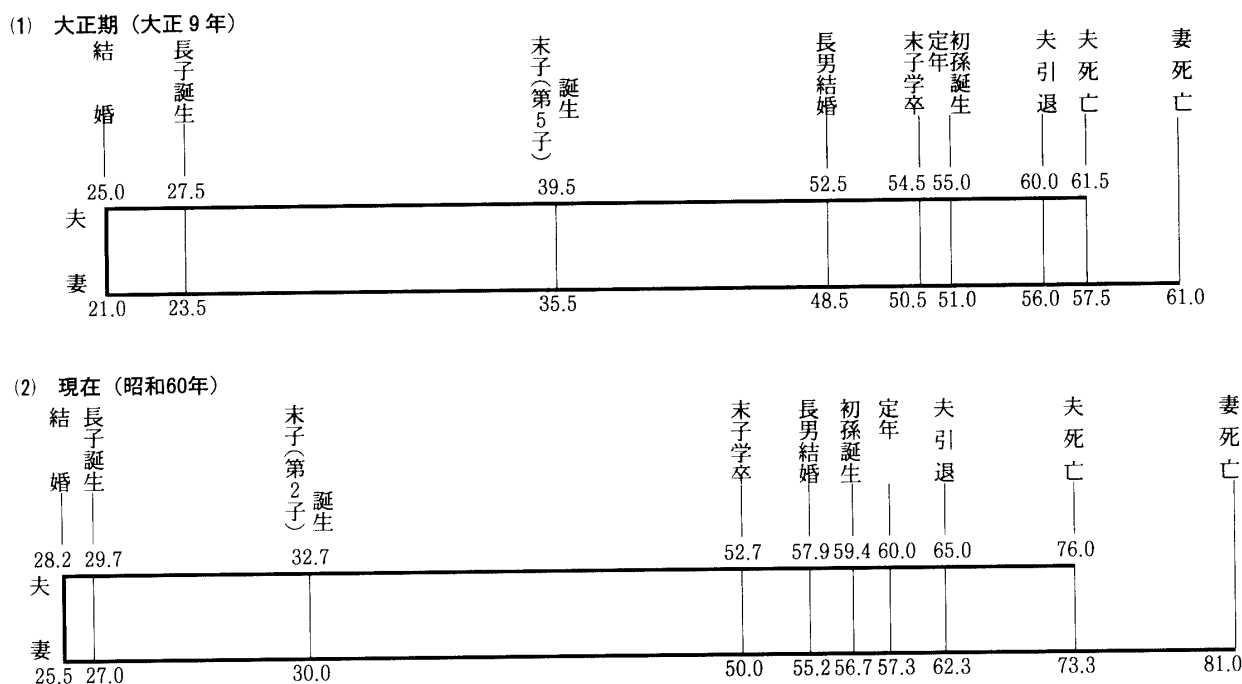
図-1は厚生省大臣官房政策課による昭和61年版の「厚生白書—未知への挑戦—明るい長寿社会をめざして」から引用した。これは、大正9年(1920年)と昭和60年(1985年)という二つの時代に、結婚した夫婦がいかなる人生模様を描くのかを平均的に表したものである。

この図ほど、大正と昭和の間にわれわれの人生のさまざまな局面が急激に変貌したことを強く印象づけるデータはないのではないだろうか。結婚の年齢、子どもの数、扶養期間と出産期間、引退後の人生模様、寡婦期間、そして寿命の長さなどはだれでもが直ぐに気がつくものである。それと同時に、急激な変化には性差の見られるものもある。例えば、男性の定年後の人生を眺めてみると、大正では寿命を終える期間との間に6—7年しか残していないが、昭和では16年以上になっていて、実にこの変化は顕著なものがある。女性の場合は、男性の定年に相当するものを仮に第二子が社会に出て自立する「末子学卒」という指標に置いて比べてみると、大正は10年余り、昭和は31年にもなり、男性の2倍の期間が人生の終えん期を前にして存在していることになる。高齢化社会や生涯発達論から見ると、こうした変化と性差は非常に興味深いものである。

### II. 現代ライフ・コースのシミュレーション

厚生省のデータは、結婚した夫婦のライフ・コースを二つの時代にわたって比較したものであった。このデータのいくつかの指標を基にして、現代の人生模様の概要を男性と女性の場合に描いたらどうな

## 生涯発達論と教育



厚生省編「厚生白書：未知への挑戦—明るい長寿社会をめざして」昭和61年度版

図一 1 ライフ・コースの変化

るであろうか。そこで、問題を簡潔にするために、昭和60年のデータの夫の年齢に着目し、かつ夫の年齢の小数点以下を4捨5入するとともに、夫と妻の年齢差を2.7歳から切り捨てて2歳としよう。もう一つの仮定として、第一子である男性と第二子の女性が結婚し、両親のライフ・コースと同じ人生を歩むことにする。すると、男性と女性で以下の図のような異なった人生模様が描けることになる。

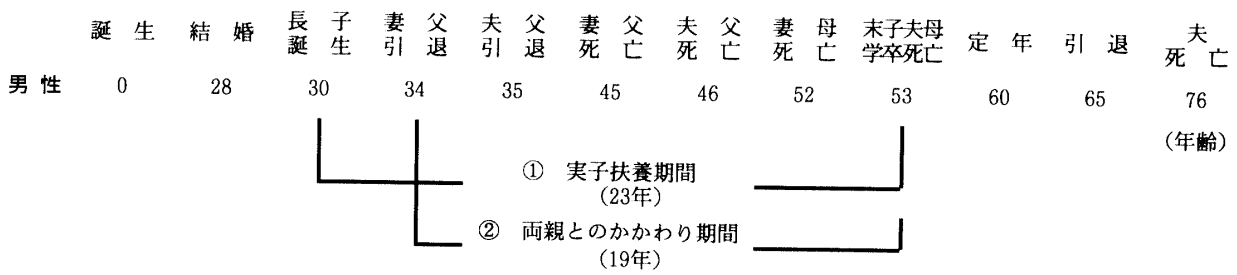
図一2を参照しながら、われわれのライフ・コースをおおざっぱに把握してみると、三つに別れていることが明らかになる。第一は、男性は20代の後半、女性は20代の半ばまでの期間で、乳幼児期、児童期、青年期に相当する。この時期は、大人を目指して、成長していく「発達の存在」の時代である。

次の期間は、男性が仕事を定年で退く60代前半、女性は子育てが完了する50代初めの末子学卒までの期間である。男性は30年余り、女性は20数年がある。この時期は、何と言っても、仕事、子育てや老後を迎えた両親との関わりなどの社会的使命や社会的義務・役割を担って生きることになり、自分のことは二の次になることが多い。「社会的存在」と名付けることもできよう。大正9年の人生は早い話がそこまでであった。

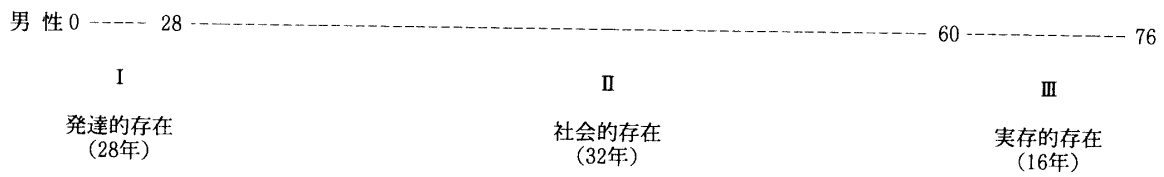
第三の人生は、男性は定年、女性は末子学卒以降の残された期間である。この長さは、男性が15年余り、女性はその倍の30年になっている。この期間は、社会的使命である子育てや両親の扶養、仕事などから距離をおくので、相対的に言って、自分の人生を生きることになる。しかも、その特徴は、死という生の終末を前にして、過去の人生を振り返り、また密接に関わった両親の生涯をも振り返りながら、「我が残された人生いかに生くべきか？」を追究する「実存的存在」になるのである。

生涯発達論から言えば、今日のライフ・コースは、「発達の存在」、「社会的存在」、「実存的存在」という生の在り方を辿りながら、ハビガースト流に言えば、その発達課題を遂行することになるのである。なお、性差に着目すれば、女性は「実存的存在」の期間が、男性は「社会的存在」の期間が相対的に最も長いということができるのである。

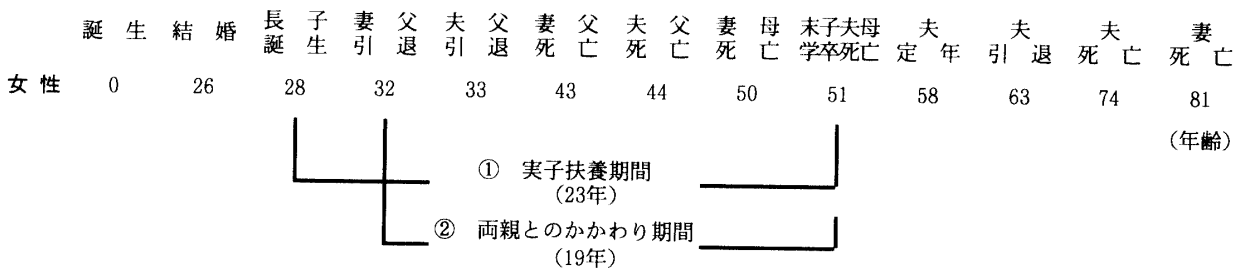
男性のライフ・コース（人生のエピソード）



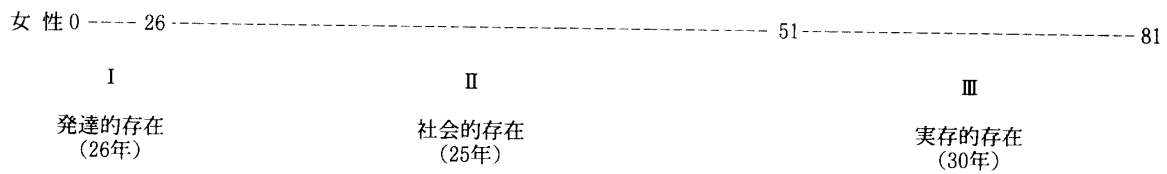
生涯発達における三つの層



女性のライフ・コース（人生のエピソード）



生涯発達における三つの層



図一 2 男性と女性のライフ・コース

Ⅲ. 実存的存在期のアイデンティティー

話題をかえることにする。アイデンティティーとは、エリクソンが青年期の心理・社会的危機の特徴を表すために、アイデンティティーの確立と拡散という観点で分析をして有名になった言葉である。青年の心理を理解するキーコンセプトとして、この言葉ほど多用されたものも少ないであろう。自己の可能性を探究する発達の存在の青年期から、成人期の社会的存在になるためには、特定の社会的使命、責任、役割にコミットすることが求められる。そのためには自己理解を基礎とするアイデンティティーが、社会的存在への移行に必須の条件となることはうなづけることである。

しかし、生涯発達論から見れば、アイデンティティーは青年期にとどまらないであろう。社会的存在から実存的存在に移行する50代から60代においては、青年期とは別の形で、もっと深刻にアイデンティ

ティーは問われ続けるのではないだろうか。よくある具体的な問いを三つ四つ掲げれば次のようになる。

- 定年退職して「毎日が日曜日」になった。これからの日々、一体何をめざして生きていったらよいか？。
- 夫や子どもに仕えることを第一に生きてきた。子どもも片付き、夫も退職した。これからはもっと違った生きかたがしたい。
- 第二の人生は自分の思いとは違ってしまった。第三の人生で挽回しなければ、このままではおさまりがつかない。
- 両親の高齢期を見ていて、自分は違った生き方をしたいと思う。とはいえ、どうしたらよいのだろう。

こうした問いはいずれも、自分の個性・独自性あるいは人生の意味を、残された生涯においてどう形づくるか、というアイデンティティーの問題なのである。しかも、青年期になされるアイデンティティーの問いと根本的に異なるところがある。それは何かと言えば「死」という人生の終えんを前にしながら、自分への問いかけがなされていることである。この自問自答は、生涯の終末を意識しているだけに、真剣なものであり、それだけ実存的存在期を意味深いものにすると考えられる。

そのうえ、高齢期におけるアイデンティティーの問いは、既に過ぎ去ったほぼ3分の2にのぼる人生に対する意味づけ、評価の上になされることになるだろう。すなわち、発達の存在期と社会的存在期への意味づけが、残された実存的存在期の生き方を左右することになる。過ぎた人生の「重さ」が実存的存在期の在り方を決めるのである。こう見ると、明らかに人生の「総決算」という性格のアイデンティティーを追求しながら、残された第三の人生を歩んでいくことになるのである。

結論を急げば、第三の人生におけるアイデンティティーは、過ぎ去った生涯を全て引き受け、わが生のエピローグをどう描くか、という重大な問題なのだとすることもできるだろう。それと図式的に対比すると、青年期のアイデンティティーは、逆に、プロローグとしてのアイデンティティーなのかも知れない。不確実な未来の「重さ」の前に不安や悩みを持ちながら、多くの期待を抱いて臨むところに本質的な特徴があるのであろう。

#### IV. 外圧と内圧

アイデンティティーとは別に先のライフ・コースのシミュレーションを分析してみたい。われわれの行動の源泉にはいろいろあるが、単純化すれば、外部からエネルギーが加わって行動を始めるか、内部からエネルギーが湧き出て行動が開始されるか、そのいずれかになる。心理学では外発的動機づけ、内発的動機づけという概念もあるが、ここでは外圧と内圧という簡単な言葉で学習論を考えてみたい。

20代後半までの発達の存在期には、大きな外圧と内圧があった。子どもや青年にとって、親や教師のしつけ、教育、社会のルールなどは典型的な外圧である。こうした外圧があるから、社会的に成熟した人格も形成されるし、基礎学力もつくのである。興味・関心のあること、探究したいことは内圧である。赤ちゃんは非常に大きな内圧があるから、母語を獲得できる。中学生の英語の学習は赤ちゃんほど強い内圧が働かない。なかなか英語をマスターできない所以である。

次の社会的存在期にも、同様に強い外圧と内圧がかかっている。仕事や役目を満足にできるのは、職場のルール、上司や部下の指示や援助、暗黙の行動原理などの外圧が機能するからである。子育ても時として、親としての社会的義務感や使命感で子どもに対する。もちろん、内圧も強い。仕事や子育て、老いた両親とのかかわりは、非常に楽しみで、大きな満足感も得られるのである。

実存的存在期になると、こうした外圧と内圧はどう変わるだろうか。確かなことは、定年や末子学卒

によって、男性も女性も外圧が低下することであろう。50代、60代以降の人生のゆとりは、外圧の低下から生み出されているのである。外圧が下がりゆとりがあるだけ、内圧で生きることが可能になり、この意味では、独自の人生が形づくられる可能性は高い。生涯学習論からすれば、実存的存在期は内圧を促しながら個性的な人生を形づくる時であり、それを援助する生涯教育プログラムがいろいろな地域で策定されているのである。

しかし、落とし穴もないではない。最大の問題は、外圧の低下が内圧の増大によって補完されるか否かということである。内圧が増加して、人間の行動のもう一つの源泉である外圧の低下を補わなかったら、間違いなく、われわれの活動レベルは低下をきたすのではないだろうか。内圧の増大とはこと意欲に関するだけに、非常にむずかしい問題に結びついているのである。

関連する問題を付け加えると、外圧の低下は、個人差の拡大をもたらす、ということであろう。すなわち、自身の力で内圧を高めることのできる人は、ゆとりを活用して、豊かな人生を積極的に開拓していくのに対して、外圧の低下に比例して内圧も低下する人々は、活動レベルが下がって無気力な日々をおくことになるのである。生涯発達の過程における個人差の拡大は、第三の実存的存在期の大きな問題なのである。

## V. 終わりに

過去の学問的研究や専門の文献にこだわることなく、かつ細かい問題はさし置いて、一つの生涯発達論を概説した。こうした見方が、既に言い古るされたものなのか、あまり一般的でないものなのか、少しは個性的な見方があるのかどうかは分からない。生涯発達の現在の関心を率直に書き著したらこのようになった次第である。

筆者の見方はこうである。今や生涯教育、生涯学習の時代だと言われるが、何はともあれ、いろいろな生涯発達論がありうるだろう。人間の生涯は、個人の内的状況や社会・文化の外的条件によって明らかに異なり、非常にバラエティーがあるから、その途の専門家に任せず、素直に多様な生涯発達論を提出してみる価値があるように思う。こう考えて、踏み込んだことのない異領域ながら、普段考えていることを敢えて一つの生涯発達論として試みた次第である。

## 討論論文 1.

# 生涯発達論と教育

東京学芸大学教育学部 齊藤 耕二

## I 生涯発達研究への二つのアプローチ

生命の始まりから、その終である死に至までの生涯の間に生じる身体・精神的変化を取り上げて、考察の対象とする試みは学問の誕生にさかのぼることのできる永い歴史を持っている。Reinert, G. (1979) は、生涯発達心理学形成の準備期間の始まりを遠くギリシャ時代に求めている。しかしながら、この時代の先駆的な考察は思弁的なものにとどまるので、実証的データを基礎とした真に科学的研究と呼べるものに限ると、その起源を、1969年から1972年にかけて West Virginia 大学で開催された「生涯発達心理学」を主題とするカンファレンスの成果が、Baltes, P. B., Schaie, K. W. (1973) あるいは Nesselroade, J. R., Reese, H. W. (1973) などによってまとめられて刊行された1970年代初頭からそれに先立つ60年代に見出すことになる。この生涯発達心理学の出現から現在までわずか20年余を経過しているに過ぎないにもかかわらず、このように短い期間のうちに、生涯発達の視点や生涯発達のアプローチが発達の心理学的研究において特に強調され、重視される位置を占めるようになった背景には、発達